

白山ふるさと文学賞

第九回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生5・6年小説の部 優秀賞

ぐちやぐちやのお弁当

明光小学校六年

細川 ほそかわ

咲 さき

「行つてきまーす！」

私は飛んでいきそうな勢いで家を出た。今日は待ちに待ったバスの遠足の日。いつもは制服だから、ふだん着で学校に行くなんて、不思議だけれど、わくわくする。だからか、足取りがとても軽い。

結果、いつもより5分程早く学校に着いた。教室に入ると、そこには有里沙がいた。

「おっはよー！」

「おはよ！綾乃、今日ちよー楽しみなね！」

有里沙は保育園から小6の今も一番の親友。家は少しはなれているが、今も時々遊びに行っている。

「綾乃ー。昼お弁当一緒に食べない？」

「いいね！いいね！食べよ！食べよ！」

「綾乃はお弁当、どんなの持ってきたの？」

「秘密。あとで見せてあげるから。」

「うん、オッケー！」

などと、楽しくしゃべっていると、すぐに時間は過ぎていった。

気付けば、バスに乗る時間。バスに乗って有里沙の姿を探す。幸いにも、前席が有里沙だった。目的地につくまでは、もっぱらおしゃべり。

ちらほらと車窓を見ていると、大きくて高い建造物は消え、その代わりにのどかな田園風景が窓いっぱい映っていた。

目的地のみどりが丘公園に到着した。その名の通り、緑がたくさんある。とても新緑が美しい。その場の空気をめいっぱい吸うと、体の中からいやなものを運び出してくれるような気がした。

その後は、はんごくにウオークラリーをした。有里沙とはちがうはんだったが、楽しく過ごすことができた。

「ではお昼にします。どうぞ。」

先生がそう言い終わると、すぐに有里沙がかけ寄って来た。

「じゃあ、食べよ！」

いつしよにしき物をしていると、有里沙が

「せーのでお弁当開けようよ！」

と提案してきた。私は、

「いいね！やるやる！」

と提案に賛成した。

私のお弁当は、おかずが色とりどりで、お花のピックもさしてある。まるで小さなお花畑のようだ。思わず「わあ。」と声を上げたが、有里沙からは何も聞こえない。いや、いつしゆんそう思った。でも聞こえる。

必死に声をおし殺した鳴き声？顔を上げると、顔を真っ赤にして泣いている有里沙と、ぐちゃぐちゃになったお弁当があった。私は、何が起ったのかわからなかった。なんと声をかけたらいいかもわからなかった。だから、有里沙のとなりで、かのじよの背中をさすることしかできなかった。有里沙は泣きじゃくりながらお弁当を食べていたが、私は食べる気になれなかった。ずっと自分自身に

「これでいい？こんなことしかできなくていい？でも、何と声をかければいい？それで有里沙は元気になる？」

と問いかけていたから。有里沙は、お弁当を食べ終わると、事のいきさつを話していた。

お母さんは、朝が苦手で、自分よりおそく起きてくることもあるけど、今日ががんばって早起きしてくれたこと。待ちきれなくて、朝内しよでお弁当を開けたら、自分の大好きなものをいっぱい入れてくれていたこと。そのお弁当を、ウオークラリーの時に転んでしまい、ぐちゃぐちゃにしてしまったこと。そんな自分をとても情けなく思うこと……

その後も遠足は続いたが、私は全く楽しくなかった。公園に来た時にはいやなものを体から運び出してくれそうだった空気さえ、けむりのように思えてくる。帰りのバスの中でも、ぼーっとしていた。家に帰り、残したお弁当をがんばって食べたが、味はしなかった。

次の日の朝、朝食もあまり食べずに

「行つて来ます。」

とため息をするかのようにつぶやいて家を出る。だが、すぐに立ち止まった。今のままで本当にいいんだろうか。もっと他に自分にできることがあるんじゃないか。頭をテストの時よりも働かせた。謝ろう。これが、今の私にできる一番のことだ。そうおもうと、私は学校とは正反対のほうへと走り出した。有里沙の家へ行くためだ。通い慣れた道を全速力で走る。急げ、急がないと。急がないと。

やっと着いた。すると、家の中から、

「行つて来まーす！」

と聞き慣れた声が聞こえた。有里沙だった。いつも通りの顔。私は今までの人生で一番の勇気をだし、

「ごめんさい。」

と謝った。私からこんなに力強い声が出るのかとびっくりした。有里沙は、

「ふふっ、ふはははは！綾乃、なんで謝ってるの？」

「ふえっ？」

思わず変な声が出た。

「えっ、だって昨日、お弁当ぐちゃぐちゃで、有里沙が泣いてたけど、何もしてあげられなかったから・・・。」

「謝ることじゃないよ。私、綾乃がとなりで背中をさすってくれたのがうれしかったよ。何も言わなくても、やさしい気持ち伝わってきた。」私の手の甲に水てきが落ちる。

「それに、ぐちゃぐちゃになったから、良いこともあった。最近、お母さんとケンカきみで、お弁当のことかくしておこうと思つたけど、やっぱり分かるんだよ、親には、『お弁当のふた、よこれてたけど、お弁当何かあった？』って突然聞かれて。それで話したら、『ごめんね。今度からは気を付けるね。ちよっと転んだぐらいでお弁当がぐちゃぐちゃにならないように、つくるよ』って。それがきっかけでなかなかおいできた。だ

から、あれは私にとって、いいことだったのかもしれない。綾乃、あの時、そばにいてくれて、ほんとうにありがとう。」

私の目からは、こらえ切れず、大つぶのなみだがこぼれてきた。ああ、よかったと安心したら、もっと視界がかすんだ。

「有里沙・・・うっ、うっ。」

「もう、綾乃！学校おくれちゃうよ！ほら、スマイルスマイル！急ぐよー！」

「うっ、うん！」

私は走りながら、なみだをぬぐつた。有里沙と一緒に学校へ向かう足取りは軽く、思いつきり吸った空気は、体からいやなものを出し、すてきなものを取りこんでくれる気がした。私は、笑顔で有里沙と走りながら、ずーっと友達でいようと心にちかかった。

